

Contents *****

特集：2018 年中間選挙の出口調査を読む	1p
<今週の”The Economist”誌から>	
”Where next?” 「分裂国家はどこへ向かうのか？」	7p
<From the Editor> ボヘミアン・ラプソディ	8p

特集：2018 年中間選挙の出口調査を読む

11 月 6 日の米中間選挙から今日で 10 日目を迎えます。これが日本の選挙であれば、翌日にはすべての結果が出揃い、選挙の分析も完了して政局は次のチャプターに移っていることでしょう。ところが米国の選挙ですから、日々新しいデータや解釈が飛び交うような状態です。本稿執筆時点においては、上院は民主 47 対共和 52 (残り 1) = 民主 35 議席増、下院は民主 230 対共和 199 (残り 6) = 共和 2 議席増、知事は民主 23 対共和 26 (残り 1) = 民主 7 増。双方が勝利宣言するような状態です。

ということで、データ面の完璧さは期しがたいのですが、今回の中間選挙結果を振り返ってみたいと思います。今後の政治情勢を読むヒントが隠されているはずです。

●2018 中間選挙へのさまざまな雑感

まずは今回の中間選挙を見ていて、筆者が感じた率直な印象をいくつかご紹介したい。

1. 選挙予想が当たった！（世論調査の復権）

米国の選挙予想と言えば、プロの機関である”The Cook Political Report”、バージニア大学の政治学教授による”Sabato’s Crystal Ball”、そして統計学者による”Five Thirty Eight”が「御三家」といえる。この 3 つが投票日直前に、「下院は民主党多数、上院は共和党多数」という予測で一致した。

その瞬間に 2 年前の大統領選を思い出して嫌な予感が走ったものである。主たる機関はすべて「ヒラリーの勝ち」を予測していたではなかったか。しかるに今回、蓋を開けてみたら結果はまさに予想通りであった。

以前は、本音を言わない「隠れトランプ派」が大勢居て、それで世論調査が当たらなくなっていた。しかるにトランプ政権が2年近くも続くと、トランプ支持者も堂々と支持を公言できるようになる。いわば現実に「慣れた」ということか。

ともあれ、世論調査は再び有用性を取り戻した。従って今後の予想（例えば2020年の大統領選挙）は、これまでよりも楽になるはずである。

2. **トランプ大統領が見せた「神の手」**

選挙戦の最終盤、トランプ大統領は2年前と同じように「最後のお願いツアー」を敢行した。11月3日にはモンタナ州とフロリダ州、4日にはジョージア州とテネシー州、そして11月5日はオハイオ州とインディアナ州とミズーリ州を訪れた。この7州で応援した上院議員は4勝2敗、知事は4勝0敗である。それがことごとく僅差の勝利である。加えて知事選では、2020年選挙を考える上で落とせないフロリダ州とオハイオ州をゲットしている。もうほとんどマジックのような効果である。

こんな結果を得たら、トランプ氏が自信過剰になるのは当然のこととして、他の共和党議員も「この人には逆らえない」と感じることだろう。11月14日の日経新聞「経済教室」で、渡辺靖慶応大学教授が「もはや共和党はリンカーンの党でもレーガンの党でもなく、トランプの党となった」と評しているのはまことに納得である。共和党は勝利を喧伝しているが、真の勝利者はトランプ大統領と見るべきであろう。

3. **“Blue Wave”は”Tsunami”にはならず**

民主党は下院で35議席以上の増加が確定している。これは大きな成果ではあるが、事前に期待されたような”Tsunami”とまではならなかった。その理由は簡単で、今週の”The Economist”誌のカバーストーリーが書いている通り、民主党は人口を代表する下院を抑え、共和党は地域を代表する上院を得たのである（*Democrats represent a majority of America’s voters, but Republicans dominate geographically.*）。日本風に言えば、「一票の格差の前に敗れた」ということになる（詳しくは本号のp7を参照）。

もっとも下院における民主党の議席増を過小評価すべきではない。来年になれば、下院を足場にトランプ政権へのさまざまな反撃手法が可能になるからだ。民主党は五大湖沿岸のミシガン州、ウィスコンシン州、ペンシルベニア州で知事、上院とも勝利を得ている。これら3州は本来、民主党の「ファイアーウォール」であった。これらを落とさなければ選挙人は46人が逆転し、2016年はヒラリーが勝っていた。

五大湖沿岸州が再び青く染まりつつあることは、ラストベルトの景気回復が思わしくないことも手伝っているであろう。今回の選挙結果を機械的に当てはめれば、共和党が2020年に過半数(270)を得ることはやや困難になった感がある。肝心なのは、民主党から誰がトランプ大統領に挑戦するか、であろう。

4. 「テイラー・スウィフト効果」はどこへ

今回の選挙における民主党の課題は、若年層とマイノリティを投票に呼び込むことであった。今回の中間選挙では投票率は 47.5%、投票総数は 1 億 1150 万人（推計）まで上昇し、2014 年選挙の 36.7%、8400 万人を大きく上回った。それでは若者層の寄与度はどれくらいかという、CNN の世論調査を見る限り 18-29 歳の層で投票したのは全体の 13%と、2016 年の大統領選挙における 19%からかえって減少している¹。

この謎解きは簡単で、「中高年層が今まで以上に投票したから」であろう。論より証拠、テイラーさんが住むテネシー州では、今回は上院選も知事選も共和党候補者が勝っている。若年層の投票者が増えたにもかかわらず、中高年層も同様に増えてしまったので結果を変えるには至らなかった。つまりテイラー発言は、保守派の反発を招いたということだろう。ちなみに出口調査によれば、18-29 歳層は 2 対 1 で民主党への投票が多く、65 歳以上層ではほぼ半々の結果であった（次頁参照）。

5. (2018 年は) 経済だけじゃないんだ！

米国選挙には、”It’s the economy, stupid!”（阿呆、経済だけでいいんだ！）という鉄則がある。しかるにこの法則、2018 年中間選挙では当てはまらなかったようだ。これまた CNN の世論調査を見ると、関心の高いテーマは民主党支持者では「医療保険」「銃規制」などであり、共和党支持者では「移民」「景気」であった。

それと言うのも、今の米国は景気が良い。「景気は？」(Condition of national economy) という問いに対し、ざっくり 7 割が「良い」、3 割が「悪い」と答えている。近年では見たことがないような高さである。さらに「関税の影響」(Effect of Trade Policy) を尋ねると、民主党支持者は”Hurt”と答え、共和党支持者は”Helped”と答え、いちばん多い答えは”No Impact”である。あんまり高関税が身に沁みている様子ではない。この調子で行くと、通商政策が問題化するまでにはさらに時間を要しそうである。

6. 民主党のスター「ベト」は 2020 年に間に合うか？

2018 年中間選挙が生んだスターは、テキサス州上院選で現職テッド・クルーズ議員を 3% 差まで追い詰めたベト・オルーク下院議員であろう。「オバマ 2 世」と呼ばれる演説の上手さで、勝っていれば 2020 年の大統領候補最右翼に躍り出たはずである。

ちなみに「テキサス州上院選で敗れた下院議員が、後に大統領になった」前例がある。第 42 代の父ブッシュ大統領である。選挙に負けたブッシュ氏は、共和党全国委員長、国連大使、CIA 長官などの要職を歴任し、レーガン政権において副大統領ポストを射止めた。民主党はこの「金の卵」に、どんなキャリアパスを用意できるのだろうか。

¹ <https://edition.cnn.com/election/2018/exit-polls>

出口調査の比較(2018&2016)		2018	mid-term		2016	Winner!	
		Total	DEM	GOP	Total	Clinton	Trump
総計	Vote					50%	50%
	Popular Vote		NA	NA		62,523,126	61,201,031
①性別	Vote by Gender						
	Male	48%	48%	51%	48%	41%	53%
	Female	52%	59%	39%	52%	54%	42%
	Are You Married?						
	Yes	59%	51%	47%	58%	43%	53%
	No	41%	61%	37%	42%	55%	38%
	Are You Married With Children?						
	Yes	30%	55%	43%	31%	48%	50%
	No	70%	55%	43%	69%	55%	43%
②人種	Vote by Race						
	White	72%	45%	54%	70%	37%	58%
	African-American	11%	90%	9%	12%	88%	8%
	Latino	11%	68%	30%	11%	65%	29%
	Asian	3%	77%	23%	4%	65%	29%
	Other	3%	54%	41%	2%	56%	37%
③年齢	Vote by Age						
	18-29	13%	67%	31%	19%	55%	37%
	30-65	60%	54%	43%	65%	46%	50%
	65-	26%	49%	50%	15%	45%	53%
④収入	Vote by Income						
	Less than \$50,000	38%	60%	37%	36%	52%	41%
	\$50,000 or More	62%	50%	49%	64%	47%	49%
	Less than \$100,000	66%	57%	41%	67%	49%	45%
	\$100,000 or More	34%	47%	51%	33%	47%	48%
⑤思想	Vote by Party ID						
	Democrat	37%	96%	4%	37%	89%	9%
	Republican	33%	6%	93%	33%	7%	90%
	Independent	30%	54%	42%	31%	42%	48%
	Vote by Ideology						
	Liberal	27%	91%	8%	26%	84%	10%
	Moderate	37%	62%	35%	39%	52%	41%
	Conservative	36%	16%	83%	35%	15%	81%
⑥宗教	Vote by Religion						
	Protestant	47%	43%	56%	52%	39%	58%
	Catholic	26%	51%	48%	23%	45%	52%
	Jewish	2%	79%	16%	3%	71%	24%
	Other	8%	73%	24%	8%	62%	29%
	None	17%	70%	28%	15%	68%	26%
	Vote by Church Attendance						
	Weekly	32%	41%	57%	33%	40%	56%
	Occasionally	41%	57%	42%	45%	47%	48%
	Never	27%	68%	29%	22%	62%	31%
	White Evangelical/Born-again						
	Yes	26%	22%	75%	26%	16%	81%
	No	74%	67%	32%	74%	59%	35%

- Most important issue facing the country ①Health care 42% (Dem76% / GOP23%) ②Immigration 23% (Dem24% / GOP74%) ③Economy 22% (Dem34% / GOP62%) ④Gun policy 10% (Dem70% / GOP29%)
- Condition of national economy Excellent 17%, Good 51%, Not so good 23%, Poor 7%
- Effect of Trade Policy Helped 25%, Hurt 30%, No Impact 37%

●民主党がなかなか勝ちきれない理由

あらためて前頁の出口調査を見ながら、民主党の2020年戦略を考えてみよう。

2年前の候補者向け投票と、今回の政党向け投票を単純に比較するわけにはいかないのだが、女性票が59%も民主党に向かっている（2年前のヒラリー票より4pも高い！）ことは、民主党にとって大きな財産と言えるだろう。もっともこれは、トランプ大統領の自業自得と見るべきかもしれない。

逆に課題となるのは、マイノリティの投票率の低さである。アフリカ/ヒスパニック/アジア系が民主党を選好する度合いは、2年前に比べて上昇している。そして全人口に占める白人の比率は着実に低下しているはずなのに、今でも投票者の7割以上が白人である。中間選挙の終盤戦において、オバマ前大統領が応援演説でフル稼働することになった理由は、どうやらこの辺にありそうだ。

若年層についても同じことが言える。せめて2020年には、民主党はなるべく若い大統領候補を立てるべきだと思うのだが、現実には名前が上がるのはエリザベス・ウォレン上院議員（1949年6月生まれ）、ジョー・バイデン元副大統領（1942年11月生まれ）、バーニー・サンダース上院議員（1941年9月生まれ）などである²。トランプ大統領も1946年6月生まれなので、2020年には全員が70代ということになってしまう。

政党IDや思想の傾向を調べると、“Democrat/Liberal”と“Republican/Conservative”の比率は2004年選挙の頃からほとんど変わっていない。「右は右、左は左」という投票行動も一貫している。そうした中で、2018年選挙は“Independent/Moderate”がやや民主党側に傾いている点は重要だと言えよう。もっとも今回の選挙では、“Progressive”と呼ばれる左派系候補が多く当選し、民主党はむしろ中道から遠ざかることになるかもしれない。

宗教の項目では、None（無宗教）が17%もいることに軽い驚きを感じる。2004年には10%だったので、ずいぶん増えたものである。無宗教者は民主党を支持する傾向が強い。その反面、共和党の岩盤支持層である“Evangelical/Born-again”は、一貫して「4人に1人」を占めている。トランプ政権による「イスラエル大使館のエルサレム移転」などの政策は、ここに原因があることは言うまでもない。

逆に言えば、民主党の「LGBT擁護」という政策は、少ない味方を取り込む一方で福音派という巨大な敵を刺激している面が否めない。民主党には、社会的弱者を取り込むことで政治運動を広げてきた歴史があるので、ここはなんとも悩ましい点である。

リベラル派の論客、マーク・リラは近著『リベラル再生宣言』の中で、民主党の問題は少数グループが「アイデンティティ政治」を展開し、党内を分裂含みにしていること、と批判している。また、リベラル派の運動は近年では大学に集中し、労働者や市民から遠ざかっている、とも。いずれにせよ敵は党内にあり、という指摘は重い。

²ここへきてヒラリー・クリントン（1947年11月生まれ）の再出馬説も浮上した。

●来年の「ねじれ議会」を迎える前に

最後に足もとの政治状況を確認しておこう。

東アジアサミットやAPEC首脳会議など、外交日程が重なっているので目立ちにくいですが、連邦議会は既に11月13日から”Lame Duck Session”が始まっている。年が明ければ「ねじれ議会」が始まり、新たな法案成立が期待できない”Gridlock”状態が待っている。

前号でも述べた通り、トランプ大統領にとっては「ねじれ、上等！」である。内政の停滞を民主党議会のせいにして、2020年再選に向けての準備を進めればよい。新しいスローガンは”Keep America Great”であり、新たに付け加えるべき事業はそんなに多くはない。

強いて言えば、「メキシコ国境との壁」という公約が残っている。12月7日に控えている暫定予算の期限切れの際には、「壁の建設予算がなければサインしない！」と言って、政府閉鎖を楯に脅すのではないか。間もなく中米からメキシコ国内を北上中の「移民キャラバン」が国境に到達する。そのとき、米国世論はどのように反応するのだろうか。

○当面の米国政治日程

- ・ **米中間選挙** (11/6)
- ・ 米レイムダック議会始まる (11/13～クリスマス休暇まで)
- ・ **東アジアサミット** (シンガポール、11/15)
- ・ **APEC 首脳会議** (ポートモレスビー、11/17-18)
 - ◇ いずれもペンス副大統領が代理出席
- ・ 民主党が党幹部選挙 (非公開) →**次期下院議長を選出** (11/28)
- ・ **G20 首脳会議** (ブエノスアイレス、11/30-12/1)
 - ◇ 米中首脳会談? デールは可能か?
- ・ **COP24** (ポーランド・カトヴィツェ、12/3-14)
- ・ **米暫定予算が失効** (12/7) →政府閉鎖の恐れあり
- ・ **FOMC** (12/18-19) →今年4回目の利上げへ
- ・ TPP が発効 (12/30)
- ・ **第116議会がスタート** (1/3)

民主党側の注目点は、来年に向けての党指導部人事ということになる。差し当たっては、大方の予測通りナンシー・ペローシ下院議長が誕生するかどうか。

手練手管に長けたベテラン議員であり、トランプ政権を攻撃する準備を進める一方で、「弾劾訴追」の可能性には敢えて触れないという柔軟な構えである。ただしさすがに新味が乏しいのと、若くて左派系の議員が増えた民主党内においては反発も少なくない。

前述の CNN 出口調査では、”Opinion of Nancy Pelosi”も尋ねているのだが、その結果は”Favorable 31%, Unfavorable 55%”というショッキングなものであった。やはり民主党の課題は党内ガバナンスにあり。「次世代の顔」がなかなか見えてこないことが、最大の問題点と言えるのではないだろうか。

<今週の”The Economist”誌から>

”Where next?”

「分裂の国家はどこへ向かうのか」

Cover story

November 10th, 2018

***分裂国家に誕生した分裂政府。中間選挙後の米国はどこへ向かうのか。The Economist 誌はどうやら共和党へのお説教は諦めて、民主党に焦点を絞って語っています。**

<抄訳>

予想通りの結果であった。11/6の中間選挙で民主党は下院で多数を得た。共和党は上院で議席を増し、大統領人事の承認は楽になる。双方が勝利を宣言し、分裂国家は分裂政府を得た。なぜなら民主党は人口で多数を代表し、共和党は地理的に優位であるからだ。

下院の一般投票数では、民主党が大差で勝っている。都市部で強く、トランプ嫌いの多い郊外でも躍進した。共和党は人口の少ない地域を固め、3州で民主党の上院議員を倒している。人口の党と地域の党の対立はいずれ行き詰まり、政治への幻滅をもたらすだろう。

10年前、上院議員は両党1人ずつが17州あった。来年にはそれが7州に減る。敵味方はくっきり分かれていて、2016年のトランプ州で勝った民主党上院議員は6人だけだ。

こんな均衡が続けば、国も両党も破壊的なことになる。共和党は長期の危険がある。今はホワイトハウスと上院を得ているが、2大政党制で過半数の得票がないことは正統性に疑義がある。民主党は短期の危険であり、選挙で勝たない限りこの不利なシステムを変えられない。いくらカリフォルニアとニューヨークで勝っても、多数には届かないのだ。

それではどうすればいいのか。民主党は米国のハートランドにアピールするしかない。

鍵は自制心にある。下院の多数を頼りに大統領を精査することはできる。しかし復讐を果たすため、かつてギングリッチ議長がクリントン政権に使ったような手法はいただけない。訴追は検察に任せるべきで、一部の民主党員が望むカバノー弾劾にも根拠はない。

民主党の次なる優先事項は、広い有権者に受けるアイデアと能力があると示すことだろう。大統領及び共和党と政策協力するのもひとつの方法である。インフラ投資と薬価問題ではその余地がある。移民問題での対立色を薄めることも必要だ。

2010年に共和党が下院で多数を得た時、当時のオバマ政権は議会が何でも妨害するのはおかしいと主張した。それは正論だし、今も正しい。だから民主党は何でも反対など言うべきではない。米国債のデフォルトを脅しに使うような行為はもっての外だ。

この勧めに多くの民主党員が反対するだろう。共和党の手法は効果的だったし、なぜ同じことをやってはいけないのかと。そこには2つの理由がある。①効果が期待できる。トランプ氏は党よりも自分が大事な人だから、共和党の従来路線をあっさり捨てて、野党との取引を選ぶかもしれない。②超党派路線を選ぶことは、民主党の長期的な利益になる。共和党は今でも「政府は害悪」だと思っている。民主党が信認を得るためには、政府への信用が欠かせない。政治の機能不全は、共和党以上に民主党に害を為すはずなのである。

<From the Editor> ボヘミアン・ラブソディ

普段あまり洋楽を聞かず、というかそもそも音楽自体に縁が薄い人間でありまして、「テイラー・スウィフト効果が…」などと言いつつ、実は彼女の歌をほとんど知りません。この年になると、聞いてもすぐに忘れてしまうのですよ、残念なことに。

そんな筆者でも、高校から大学時代に聴いたクイーンの曲であれば、大脳海馬の中に数十曲が落ちていて、何かの拍子に耳元で流れ始めて止まらなくなります。『キラー・クイーン』や『伝説のチャンピオン』くらいは普通だと思うのですが、初期のアルバムにいくつか大好きな曲があり、特に”Queen II”に入っていた『マーチ・オブ・ザ・ブラック・クイーン』がお気に入りです³。

ですから、フレディ・マーキュリーの半生を描いた映画『ボヘミアン・ラブソディ』⁴が封切られて、すぐに行ってまいりました。いちおうレコードは買うけど、コンサートに行くほどのファンではなく、フレディがゲイだったことと AIDS で死んだことくらいしか知りませんでしたので、この映画は楽しめました。特にラストで流れるクイーンのナンバーは、どれも歌の意味が今までよりも深く感じられ、文字通り痺れる思いで聞き入りました。

以下は敢えて本筋と関係のない感想のご紹介です。

この映画は、1970年代から80年代の世界を上手に描いています。特に面白いのが当時の曲作りの様子。何しろPCはおろか、CDが登場するはるか以前の世界ですから、作曲に使う機材がとっっても古臭い。『ボヘミアン・ラブソディ』のコーラスも、ダビングを繰り返して作っているわけです。よくまああんな原始的な方法で、あれだけ壮麗なサウンドが生み出されたものだと感心します。

それと同時に、1980年代当時にゲイであると知られることがいかに憚られたか、AIDSがどんなに怖い病気であったかを、21世紀の若い世代に伝えることはやっぱり難しい。今の時代であれば、きっとフレディはあんなに苦しまずに済んだことでしょう。もっともその葛藤が、作品を生み出す原動力になっていたのかもしれない。

つまり技術の面でも社会心理の面でも、世の中はどんどん変わっている。ひとつひとつは小さな変化であっても、30年もたつと本当に昔のことが分からなくなってしまう。その一方で、不意に過去の記憶が蘇ることもある。映画のラストに登場する1985年のライブエイドを、筆者は日商岩井独身寮のテレビで麻雀卓越しに見ていました。入社2年目の25歳でしたからねえ。いや、そりゃあもうホントに昔のことなんです。

ところが、耳の奥に残っているサウンドは不思議と古くならない。70年代にソニーのラジカセで聞いたはずの曲が、脳内で再生されるときには最新の音響施設で聞いたような音になっている。音楽の記憶は、上書き保存されるものなのでしょうか。

³ 6分33秒もあって、コーラスが錯綜して、文字通り『ボヘミアン・ラブソディ』の原型です。あたしやこっちの方がいいと思うんですけどねえ。映画の中には使われておりません。残念。

⁴ <http://www.foxmovies-jp.com/bohemianrhapsody/>

どうやらこの映画、同世代人の琴線をいたく刺激するようでありまして、知人、友人たちから「見たぞ！」の声をよく聞きます。まだの方、どうぞ映画館にお急ぎください。たとえ映画に満足できなかったとしても、少なくとも 70 年代から 80 年代の記憶が蘇ることは保証いたします。

* 次号は 2018 年 11 月 30 日（金）にお送りします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記にてお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com